

Under Western Eyes (1911) の「語り」における 自由間接話法（思考）とアイロニーについて

金城 博之

0. 序

ジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad) の小説 *Under Western Eyes* (1911)¹⁾ は、政府による弾圧と反体制側のテロの横行する帝政ロシア・サンクトペテルブルクと亡命活動家達の闊歩するジュネーブの二都市が舞台である。1904年に実際にロシアで起こった政府高官爆殺事件をモチーフとした政治小説でもあるが、同時に、孤独と罪の意識に苦悩する青年の葛藤を克明に描いた心理小説でもある。

物語は、登場人物の一人として登場する「語学教師」を語り手として、主人公 Razumov (ラズモフ) の日記を頼りに事件の顛末を再構成しながら語られていく。作者コンラッド自身が9年後に書き加えた「作者おぼえがき」によると、創作の意図は「ロシアの政治情勢というよりはむしろロシアの心理そのものを描こうとする試み」(5)であり、反ロシア感情をもつ作者²⁾としては一旦自らのポーランド性を抑制するため観察者である語り手を必要としたことは、むしろ当然のことであった。小説の時代背景と同様、ロシア圧政下に苦しむポーランドで生まれ、しかも流刑となった革命家の父を持つコンラッドとしては、執筆の際に「著しく分裂した意識」で題材と向き合わざるを得ず、その二重性が複雑な語りに反映されている(キャラバイン 205)と考えることができる。

これまでの研究では、この語り手である語学教師が多くの批評家を悩ませてきた。その多くは否定的であり、語り手は「頭の鈍い西洋人」「取るに足らない人物」「ただの観察者」、「気取った抽象的思考」を弄ぶ人物で、「嘘の父」で「悪魔的」などという評価を受けている。³⁾ 一方で語り手の中に何らかの含意を探る研究もあるが、⁴⁾ コンラッド全盛期とされる小説 *Lord Jim* (1900) や *Heart of Darkness* (1902) に登場する語り手マーロウに対し、本作の語り手は、あまりに傍観者的で哲学的に浅く人間性に対する探究力に劣るとされ、作品自体の低評価に留まらずこの作品以降のコンラッドの創作力の衰えが指摘される要因となっている。作品の魅力を大きく損なっている原因として、反ロシア感情を抑制しようとするあまり他の登場人物に深入りをせず傍観的になりすぎたため、読者の期待する洞察や探求をあまりに犠牲にしたと指摘されているのだ。

本稿では、「西欧の目」である語学教師が、「ロシアの心理」であるラズモフをどのように解釈し提示しているかを検証するため、特に語りの「地の文」中で語り手以外の登場人物の発話や思考を語りの視点から代弁する「自由間接話法（思考）」で表されている箇所を中心に読解を進める。

自由間接話法とは Free Indirect Speech と呼ばれ、「引用符・伝達部ともに用いることなく、作中の人物の一人称の発話を三人称の地の文に埋め込む技法」(橋本 2009)⁵⁾ と形式上は定義

できる。自由間接話法は直接話法と間接話法の間位置し、伝達節は省かれるが、時制と代名詞の選択は間接話法に関連している (Leech& Short, 260-261)。例えば、“I am happy now!” という発話を元話者が行ったとすると、その発話を語り手が以下のように引用することが可能である。

- 1) He said, “I am happy now!” (直接話法)
- 2) He told me he was happy then. (間接話法)
- 3) He was happy now! (自由間接話法)

ここで、3) では、引用符及び伝達部の削除、代名詞の選択 (I→he)、直示表現 (now) の使用、口語を示す *exclamation mark* の保持などで直接話法と間接話法の間用法と言える自由間接話法だと知ることができる。

一方、自由間接思考は、登場人物の発話ではなく、思考内容を提示するという点で自由間接話法とは異なるが、形式上は自由間接話法と同様である。

- 4) He thought, “Is she happy now?” (直接思考)
- 5) He asked himself if she was happy then. (間接思考)
- 6) Was she happy now? (自由間接思考)

思考の内面に切り込む表現である自由間接思考の場合は、元話者に寄り添う表現と言えるが、自由間接話法の場合は、語り手によって対象となる登場人物の発話に距離感が生じ、アイロニーが付与されることもある。⁶⁾ 山口 (1993) によると、英語の自由間接話法 (思考) は、日本語の描出話法とは厳密には異なり、日本語ではこのような形を用いて地の文中で元話者と距離を置いた客観的な表現が取りづらい。⁷⁾

語り手が自分の経験談とラズモフの日記をもとに物語を再構築していくという体裁のこの小説では、登場人物、特にラズモフの発話や思考が語り手によってどのように引用されているかが、小説を読み解くうえで重要な要素となる。特に、前半の「被害者」としてのラズモフと後半の「加害者」としてのラズモフを、語り手がどのように読者に提示しているかに焦点を当てる。語りの中で登場人物たちの声が交わる自由間接話法 (思考) の部分を検証していくことで、言語運用の側面から本作品の傍観者のとされてきた語り手が実際には物語という行為にかかわる積極的な語り手であることを指摘したい。

1. 「被害者」としてのラズモフ

物語は暗殺事件を起こした大学生 Haldin (ハルディン) が、同じ大学で哲学を学ぶ主人公ラズモフの下宿に逃げ込むところから動き出す。ラズモフは、高い身分の人物の落胤であるという噂がある以外には身内を持たない若者で、自分自身の学問だけが世に出る唯一の手段である。出世のため論文の懸賞に没頭する政治的活動とは全く無縁なラズモフが、次第に事件に巻き込

まれていく様が、被害者であるラズモフ自身の視点も交えながら語られていく。

冒頭で語り手は、物語の信頼性を確保するため日記をもとにした物語であることを明かし、続いて自らの書き手としての力量の限界を表明する。自分には“high gift of imagination and expression” (3) がないため、ラズモフを創作することは不可能だと述べる。自分はラズモフの書いた日記をもとに記述しているのであり、何ら創作上の技巧を加えたわけではないと強調しているが、ここで語り手は言葉に対しての彼自身の信条と矛盾することになる。すなわち、書かれた言葉に依存しながら、一方で言葉は“the great foes of reality” (3) と現実を捉えることの困難さを述べているのである。

Words, as is well known, are the great foes of reality. I have been for many years a teacher of languages...To a teacher of languages there comes a time when the world is but a place of many words and man appears a mere talking animal not much more wonderful than a parrot. (3)

このような言葉への不信はコンラッドの語り手によく見られるが、語学教師はラズモフの日記を例外と見なしているのか明言を避けている。

語り手の矛盾は語り手とロシア的なものとの距離にも見て取ることができる。語り手によるとロシア人は“extraordinary love of words” (5) を持っていると同時に“one can't defend oneself from suspicion that they really understand what they say.” (4) と述べている。だが直後に、それが物語の筋から外れた脱線であり“*But I must apologize for this digression*” (4) と読者に対して謝罪している。まるで語り手自身がロシア人のように饒舌であり、言葉が止まらないかのようである。

ロシアの高官爆殺事件は先に述べたように実際に起こった事件をモデルにしているが、ラズモフの登場以前の語り口は解釈を排除した全知の語りの中の地の文として坦々と語られており、語り手がこの事件に賛同しているのか憤慨しているのか読み取ることはできない。大学生ハルディンが彼の下宿に一時かくまってもらうために転がり込んできた場面でこの事件についてハルディン自身が語った内容を語る場面において自由間接話法が用いられている（以下、引用中のイタリック・太字・下線はすべて著者による。イタリック・太字は著者による強調、下線は自由間接話法（思考）を示す）。

He told Razumov how he had brooded for a year; how he had not slept properly for weeks. He and “Another” had a warning of the Minister’s movements from “a certain person” late the evening before. He and that “Another” prepared their “engines” and resolved to have no sleep till the “deed” was done. They walked the streets under the falling snow with the “engines” on them, exchanging not a word the livelong night... (13)

第一文でハルディンがラズモフに語ったという導入がなされ、その内容がセミコロン以下で自由間接思考で示されている。“for weeks,” “no sleep,” “not a word,”のような誇張した表現と“Another,” “engines”などの繰り返しは、興奮したハルディンの口調が再現された自由間接思考と見て取ることができる。語り手は日記をもとに物語を再構成しているのも、ここでは元発話者ハルディンの語った「英雄的行為」を語り手がラズモフを間に介在させて自由間接思考によって引用していると考えることができる。⁸⁾ ハルディンに対するラズモフの苦々しい感情が、視点をラズモフに置くことで語り手の引用に際立っている。さらに“Another,” “engine,” “the deed”といったハルディンの使う隠語を直接引用することで独りよがりな暴挙にまきこまれるラズモフの憤りが伝わってくる。語りの中にハルディンの声を交えることで、読者はラズモフと共にテロリストの声を聞くことになる。

引用における登場人物たちに対する原文の語りの距離感を確認するために、ここで翻訳版を参照し比較してみたい。この箇所の日本語訳は、ハルディンの発言の引用として直接話法で表現されている。

一年間考えぬいたことだ。ここ数週間満足に眠っていないなどしゃべりだした。昨夜おそく、「ある人物」からの情報でぼくと「いまひとり」の同志が大臣の動静を知った。ぼくと「いまひとり」の同志で「武器」を用意した。われわれは「仕事」が終わるまでは眠らないことにきめた。雪の降る街を「武器」を持ったまま、長い夜だったが、ひとことも口をきかずに歩きまわった。(19)

日本語訳では、ハルディンを指す指示代名詞が「ぼく」で、発言そのままの口調を残した口語体となっており、引用符は付けられていないもののハルディンの語った内容を直接話法で引用していると受け取ることができる。対照的に先に引用した英文では、He や They の使用から、視点は語り手（ないしはラズモフ）にあることが分かる。つまり英文では保たれている元話者ハルディンと語り手の距離が、日本語訳では消えてしまっている。日本語訳では元話者ハルディンの存在だけが感じられるが、英文ではハルディンよりも聞いているラズモフの存在も強く感じられる。原文で読者はラズモフの視点に寄り添うことになり、ラズモフに同情するよう語られているのである。

ハルディンを裏切ったのは、自分に火の粉が降りかかることを恐れた本能による当然の反応であったとラズモフが自己弁護をする場面でも自由間接思考が用いられている。自分が政治事件に巻き込まれることを想像しさらに恐怖を覚えているが、第一文のように判断した思考過程が、第二文目以降、思考を辿りながら説明されている。

He concluded that it was a sound instinct. Haldin *must have been seen*. It was impossible that some people *should not have noticed* the face and appearance of the man who threw the second bomb. Haldin was a noticeable person. The police in their thousands *must have had* his description within the hour. With every moment the

danger grew. Sent out to wander in the streets he **could not escape** being caught in the end.

The police **would very soon find out** all about him. They **would set** about discovering a conspiracy. Everybody Haldin had ever known **would be** in the greatest danger. Unguarded expressions, little facts in themselves innocent **would be counted for crimes**. (15)

推量表現 “would” や “could” の使用は、ここでの推量の主体はラズモフ以外あり得ないため、自由間接思考により語り手がラズモフの思考を引用しているとみることができる。そこから、裏切り行為に至るまでの心理過程が内面における思考として臨場感を持って表現されるとともに、これから裏切りを行うラズモフに対し読者に同情や共感を持たせる表現となっている。そして万が一彼が巻き込まれ、遂に逮捕に至った場合の彼の辿る哀れな末路を想像する。

Razumov saw himself shut up in a fortress, worried, badgered, perhaps ill-used. ***He saw himself*** deported by an administrative order, his life broken, ruined, and robbed of all hope. ***He saw himself***—at best—leading a miserable existence under police supervision, in some small, faraway provincial town, without friends to assist his necessities or even take any steps to alleviate his lot—as others had. **Others had fathers, mothers, brothers, relations, connections, to move heaven and earth on their behalf—he had no one. The very officials that sentenced him some morning would forget his existence before sunset.** (15-16)

ここで “He saw himself” の繰り返しにより彼が思考しているという文脈が示されており、ラズモフが想像した哀れな自己イメージが提示されている。

語り手はここで、巧妙な語りによって読者を操作しているとみることができる。というのも、実際には語り手は物語を語り始める時点でラズモフの日記を手にはしているはずで、この時点で既に事件の結末を知っている。従って後に彼を献身的に介護する女性テクラ (Tekla) の存在を知っていることになる。また不具になった後でも革命家達に一目置かれる存在となり彼の話を聞きに革命家達が訪れることも知っており、実際の結末を知ったうえで上の引用のように孤独なイメージを読者に提示していると考えられる。このことから単なる事実を伝えるだけの傍観者的語り手ではなく、むしろ劇的な効果やアイロニーを狙った巧妙な語り手とみることができる。

家族的つながりを誰とも持たないがゆえに事件に巻き込まれ、これから味わうであろう孤独や絶望がラズモフを苦しめ、唯一の世を渡っていく頼みの綱の立身出世も遠のいていく。そして眼前のハルディンに意識が向かう時、再び自由間接話法が用いられる。

He shuddered. Then the peace of bitter calmness came over him. It was best to keep

this man out of the streets till he could be got rid of with some chance of escaping. That was the best that could be done. Razumov, of course, felt the safety of his lonely existence to be permanently endangered. This evening's doings could turn up against him at any time as long as this man lived and the present institutions endured. They appeared to him rational and indestructible at that moment. They had a force of harmony—in contrast with the horrible discord of this man's presence. He hated the man. He said quietly — (15-16)

視点がラズモフにあるため、直時表現 *this* の使用が見られる内的発話を引用した自由間接話法と理解できる。暗殺でさえも圧政に対して民衆を解放する志をもつハルディンにとっては「英雄的行為」だが、政治に無関係な立場のラズモフにとっては迷惑でしかない。視点がラズモフにあり、直示表現の *This* を多用することで、目の前のハルディンに対して向けられたラズモフの辛辣な視線と憎悪に変わる感情が表されている。ここで指摘しておきたいのは、この例でみられるように、自由間接思考が思考内容の発話化というよりは、ラズモフにより実際になされた内的発話が自由間接話法により引用されていると見る方が自然に思われる箇所が多々あるという点である。これは日記という心理状態を文字化したものを語り手が引用しているというこの小説の設定によるものと思われる。従って、読者は思考内容に対して、自由間接話法と同様に発話者ラズモフに対して距離感を感じることになる。

第一章の段階で読者は、ラズモフの突如おかれた境遇に対して同情を持つ。読み手は、語り手の自由間接思考によってラズモフの心の動きに寄り添う形で侵入者ハルディンに対峙させられる。読み手は、次第にラズモフとともにハルディンの独りよがりな暴走に憤りを感じるよう仕向けられる。だが、その後の「反発」から「恐怖」、「恐怖」から「憎悪」へと心理が推移するラズモフもまた、心理探求の対象として距離をもって提示され、彼を批判的に見る余地が残される。引用最後の文章 “He hated the man” から読み手は「憎悪」を感じ取り、暴走ではあるが国を想い危険を冒した若者ハルディンに対し、立身出世と保身しか考えないラズモフとの間の距離感が微妙な語りの中に表現される。語り手が自由間接話法（思考）を用いていることで、そのような主人公に対する批判的読みの可能性を開いているのである。

そもそもハルディンがラズモフを選んだ理由は、彼を信頼のおける優れた人物と見込んだからだけではない。家族を持たないラズモフならば、秘密が保たれるに違いないと身勝手に思い込んだからなのだ。ハルディンはラズモフと対照的な人物である。なぜなら立身出世を生きる希望とするラズモフに対し、ハルディンは自分の命を圧政に苦しむ民衆やロシアの将来のために犠牲にするつもりであり、自分に迫る死さえも以下のように捉えている。

What will become of my soul when I die in the way I must die—soon—very soon perhaps? It shall not perish. Don't make a mistake, Razumov. This is not murder—it is war, war. My spirit shall go on warring in some Russian body till all falsehood is swept out of the world. The modern civilization is false, but a new revelation shall

come out of Russia. Ha! you say nothing. You are a sceptic. I respect your philosophical scepticism, Razumov, but don't touch the soul. The Russian soul that lives in all of us. (16)

自らの魂は死後もロシアの魂と一体であるから生き続けると信念を持っているが、ラズモフは彼に判決を言い渡す人物も彼の存在をすぐに忘れてしまうだろうと考えている。

両者は他者とのつながりの有無に関しても対照的である。注意すべきは、ラズモフのハルディンへの憎しみが決定的となるのは、ハルディンの会話の話題が最愛の母と妹ナタリー (Natalia) に及んだ時だということである。家族を語る時のハルディンは“God”という言葉頻りに用いるが、この時ラズモフの心中に何らかの変化を見て取ることができる。怒りと憎しみを抱くラズモフは、あたかも“the bottom of an abyss”から“You believe in God, Haldin?” (17) と悪魔的に問う。平凡な人間の中にも存在する悪魔的な部分が、他者と繋がりを欠く孤独な境遇において裏切りへと彼を駆り立て、密告とハルディンの母親と妹への復讐の契機となっており、逃亡を手助けするはずのジミアーニッチ (Ziemianitch) への暴力やハルディンの母や妹への復讐へと繋がっていく。

2. 「加害者」としてのラズモフ

ラズモフはハルディンの遺された家族に対しては加害者と言える。ラズモフにとって、裏切りとはまず“a moral bond”が裏切りの対象との間に存在していなければ成立しないものであり、人が裏切ることができるのは自分の良心だけだと考えている。この部分は引用符が用いられており、語り手を介在しないラズモフ自身の声として直接話法で示されている。

“Betray. A great word. What is betrayal? They talk of a man betraying his country, his friends, his sweetheart. There must be a moral bond first. All a man can betray is his conscience. And how is my conscience engaged here; by what bond of common faith, of common conviction, am I obliged to let that fanatical idiot drag me down with him? On the contrary—every obligation of true courage is the other way.” (16)

ラズモフによれば、自らの良心を裏切るものでなければ、本当の裏切りにはならない。すなわちハルディンに対し良心のつながりが存在しないのであれば裏切りではないというのである。密告されたハルディンは処刑されるが、ラズモフの自己弁護にラズモフの心の声である自由間接話法が用いられており、ここでも読者の感情移入の度合いを制御している。

His new tranquility was like a flimsy garment, and seemed to float at the mercy of a casual word. Betrayal! Why! the fellow had done all that was necessary to betray himself. Precious little had been needed to deceive him. "I have said no word to him that was not strictly true. Not one word," Razumov argued with himself. (53)

ここで“argued”という語から、すでに良心の葛藤を感じ始めていることがうかがえる。ナタリーによって怒りと憎しみから解放される “freed from the blindness of hate and anger” (265) まで、それを抑圧し振り払うようにシニシズムに陥っていく。逆に事務総局のミクーリン (Mikulín) 顧問官によって無政府主義者達とのつながりを疑われることになり、追い詰められた挙句、スパイとしてジュネーブに送られることになる。そこでの彼はロシア専制政治に敵対する勢力に迎えらる。

ジュネーブでの彼の行動は、日記からではなく語り手自身の限られた視点から描かれるが、語り手の信頼性について考慮すべき介入が挿入されている。第一章の最後で部屋を立ち去ろうとするラズモフに対し、監視から逃れられない運命にあることを暗示する “Where to?” (74) という顧問官の問いかけがなされた後、時間通りの語りを中断し、ジュネーブへと場面が移る時、語り手は敢えて彼の語るこの物語が “a work of imagination” ではなく事実に基づいたものだと強調する。

I have no talent; my excuse for this undertaking lies not in its art, but in its artlessness. Aware of my limitations and strong in the sincerity of my purpose, I would not try (were I able) to invent anything. I push my scruples so far that I would not even invent a transition. (75)

この語り手による自己弁護はミクーリンの尋問から読者をナタリーらのいるジュネーブへと引き寄せる機能を持っており、このタイムシフトがスパイとしてジュネーブに送られることになるという経緯を一時的に読者から隠ぺいする機能を担っている。事実の記述に徹するならば、時系列順に語るべきであるが、自分の語り手としての限界を述べながらも、語り上の工夫を凝らしている。

この後、妹ナタリーに出会うことになるが、彼女は生前の兄の手紙からラズモフこそ兄の志を最も理解する親友であり信頼に値する人物であると考えており、兄との唯一のつながりとしてラズモフの存在を必要としていたのである。その場に居合わせた語り手からナタリーが兄を裏切った者の存在を疑うことで、どうにか心の平静を保っていると聞かされたラズモフは激しく動揺する。

この後ラズモフは亡命ロシア人マダム・ド・S— (Madame de S—)、女性解放論者ピーター・イヴァノビッチ (Peter Ivanovitch)、侍女テクラ、革命家ソフィア・アントノヴナ (Sophia Antonovna) らと会話を交わしていくが、裏切りを働いたのに信頼され続けることにいら立ちを隠せない。だが、ソフィアからジミアニッチがハルディンの処刑後自殺を遂げたというサンクトペテルブルグの情報提供者からの手紙の存在を知らされると、状況が一変する。まず、ラズモフはその情報提供者の正体は誰か思いを巡らせる。

Her eyes were cast down. He waited, not very alert now, but with the grip of the ever-present danger giving him an air of attentive gravity. *Who could have written*

about him in that letter from Petersburg? A fellow student, surely—some imbecile victim of revolutionary propaganda, some foolish slave of foreign, subversive ideals. A long, famine-stricken, red-nosed figure presented itself to his mental search. That **must have been** the fellow! (190)

ここでは疑問文の語順 “Who could have written”、推量表現 “must have been” 等で自由間接話法であることが示されている。彼にとって都合の良いことにソフィアは、ジミアーニッチがラズモフによって受けた暴力を警察のスパイによる犯行と推測する。

Now, since his position had been made more secure by their own folly at the cost of **Ziemanitch**, he felt the need of perfect safety, with its freedom from direct lying, with its power of moving amongst them silent, unquestioning, listening, impenetrable, like the very fate of their crimes and their folly. **Was this advantage his already? Or not yet? Or never would be?** (205)

自らの身の安全のため、他人の死さえも都合がよいと考えるラズモフの思考が自由間接話法によってなされている。ソフィアはハルディンを当局に売ったのはこのジミアーニッチであり、良心の呵責による自殺と考える。今や完全に安全な立場となったラズモフは、もはや嘘をつき続ける必要も無くなったと考え、ここでも “Thanks to the devil” と「悪魔的な」笑みを浮かべる。ハルディンのよき理解者であり警察の捜査にも平然とする度胸の座った人物として革命家ソフィア達から一目置かれることとなったのである。

第四部冒頭で、語り手は再び時間を戻し、顧問官による尋問の場面での “Where to?” という問いへ読者を戻す。この段階において初めて、これまでのラズモフの変貌、冷笑的態度、不安を解く鍵が読者に与えられる。これまで単に誤解されている側であると思われてきたラズモフが、実は欺く側であったという事実、ナタリー、語学教師や革命家達と同様、我々読者も騙されていたという事を知るのである。

以後、裏切りと贖罪のテーマがどのように果たされていくのか、それによりナタリーにどんな運命が待っているのかに読者の関心が移っていく。裏切り者の正体が、彼女の信頼しきっていたラズモフ自身であることを知ったナタリーはその衝撃に気を失うが、この時点での物語中の語り手は、彼の葛藤を知らないため、激しく彼を責めている。ラズモフは絆を持ち始めたナタリーとの関係において自身の良心を裏切ったと言える。裁くのは法でも当局でもなく自分自身で決着をつける事をラズモフは決心したことは、彼自身の裏切りに対する信条からは自然な結論と言える。そして真相を打ち明けるナタリーへの手紙を書き終えた彼は自ら革命家たちの下へ赴き告白し、無政府主義者たちの制裁を受け、耳の聞こえない不具者となるのである。

ラズモフを中心とする物語が一旦告白とそれに続く制裁の場面でクライマックスを迎えた後、後日譚として語られるのは、これまでむしろ脇役であった2人、マダム・ド・S—の侍女テクラと女性解放論者イヴァノビッチのその後である。これまでラズモフは物語の中心に位置し、そ

の発言・思考が引用によって語られてきたが、終結部におけるラズモフはむしろ遠景に遠のき、語りにおいて声を発することはなくなり、脇役との対比により読者に提示されている。

まず、語学教師とナタリーの会話から、ラズモフが侍女テクラによって看病されていることが知られる。皮肉にも事件後のラズモフはテクラの存在によって恐れていた孤独から解放されている。すでに見てきたように、彼は当初事件に巻き込まれた自分を想像していた。テクラによって介抱されるラズモフは決して一人きりではないことを語り手は当初から知っていたはずであり、むしろハルディンが駆け込む前の方が孤独であったと言えるのではないだろうか。恐れていた運命とテクラによってもたらされる結末のコントラストによって、孤独な魂の告白の物語が帯びる悲劇性をさらに強調している。テクラによる支えを既に知る語学教師があらかじめ事件の顛末とは異なっていた妄想をあえて読者に語っていたとみることも可能である。

孤独という観点からみるとラズモフは女性解放論者イヴァノビッチと対照的である。マダム・ド・S—の死後、彼女の遺産を得られなかったイヴァノビッチは、田舎娘と結婚してしまう。両者とも最後はそれぞれ女性と共にいるが、裏切りを告白したラズモフが博愛精神を持つテクラと暮らす一方で、イヴァノビッチは何も知らない田舎娘と結婚し、革命をあっさり捨ててしまっている。他のコンラッドの作品“*The Anarchist*”や*The Secret Agent*にみられるような無政府主義者たちに対する作者の強い不信感がここでも見られる。革命家たちが知見を得に訪れるのは有名な本を出版したイヴァノビッチではなく耳の聞こえなくなったラズモフである。物語の筋の中で重要な人物とは考えられないテクラとイヴァノビッチの終結部での再登場は、ラズモフの物語にアイロニーを与えている。アンチ・クライマックスとなっているこの終結部は、「西欧人の眼に」というタイトル同様アイロニーに満ちたものとなっている。

3. 結び

これまで見てきたように、語り手は、対象と微妙な距離を保ちながら、自由間接話法の使用により巧みに、前半部ではハルディンに対するラズモフの反応を通して読者に共感を求め、後半部ではラズモフに読者が反感を抱くよう効果的に用いていた。

コンラッド作品の大きな魅力は、人間性に対する洞察と対立概念の闘争といえるが（キャラバイン 204）、*Under Western Eyes*でもその葛藤が描かれており、裏切りと贖罪というテーマを心理的に奥深く掘り下げている。批判されることの多かった語り手・語学教師も単に事実を記述しているわけではなく、彼が装っている傍観者などでは決してないことを見てきた。

ロシアという舞台設定は、贖罪における心理を描くというコンラッドの試みをむしろ困難なものとしたに違いない。なぜならば、ロシアと距離を取りつつ、ロシア人の内面に接近するという矛盾を解決する必要があったからである。一方でラズモフに象徴される西欧文明も言語と共に批判されている。⁹⁾ ラズモフの心の声を巧みに自由間接話法（思考）を駆使して表現する語り手は、読者にもたらす効果に無頓着ではなく、タイトル同様、登場人物達をその「眼の下に」置くことで、特に主人公に対し距離を取るよう求めているのだ。¹⁰⁾ 策謀に満ちたロシアが言葉の有限性を象徴する存在であることや耳が聞こえなくなって初めて心の平静を得たことを考え合わせると、日記や手紙といった言葉による告白に一定の価値が与えられた結末は、対

立する概念に引き裂かれながら言葉の海でもがくしかない他のコンラッドの主人公たちの運命と同様にアイロニカルだといえる。

*Under Western Eyes*の執筆後コンラッドは極度の神経衰弱に陥ったが、この小説の複雑な語りの中に作者自身の言葉との格闘の跡を見ることができる。コンラッドの作り出した語り手・語学教師は、自由間接話法（思考）を用いて読者を主人公に同情させたり、反発させたり感情移入を巧みに制御する語り手である。あえて物語を時系列順に語らないことで劇的な効果を狙っているにもかかわらず、自身の“artlessness”を強調するなど一筋縄ではいかない語り手はまさに苦心の結果であり、本作が作家としての衰えを感じさせるものではなく、むしろ語り手マーロウを生み出した作家コンラッドの面目躍如の作品といえるのではないだろうか。

注：

- ¹⁾ Joseph Conrad *Under Western Eyes* (1911) New York: Oxford World's Classics, 2003. 邦訳は、集英社版世界文学全集 61「西欧の眼の下に/青春」（篠田一士・土岐浩二訳、東京：集英社、1981）を参照した。以下引用カッコ内の数字は原文・邦訳それぞれのページを指す。
- ²⁾ コンラッドの反ロシア感情に関しては、1899年2月日付 R. B. Cunninghame Graham 宛書簡（*The Collected Letters of Joseph Conrad* 113）や1919年に執筆され後に *Notes on Life and Letters* (1921) に収められた“The Crime of Partition”を参照。
- ³⁾ キース・キャラバイン 「西欧の眼の下に」伊村大樹訳、J.H.ステイブ編著「コンラッド文学案内」日本コンラッド協会訳、東京：研究社（2012）、204-233。
- ⁴⁾ 例えば、松方（1992）は、語学教師が作者（コンラッド）の分身であり、外国人であるがゆえ疎外され、物語を推し進める行動力を発揮できない語学教師は、作品の中をさまよう作者の姿に重なりとみている。
- ⁵⁾ 自由間接話法を本格的に使用した作家は英国では Jane Austen が最初だと言われる（河内1993、黒川1994）。また発話だけでなく登場人物の思考や内的発話の引用として用いられた場合は、自由間接思考（Free Indirect Thought）と呼ばれる（Leech and Short, 270-279）。
- ⁶⁾ Leech & Short（2007）によれば、自由間接話法においてアイロニーが生じる理由として以下のように説明している。

... FIS (Free Indirect Speech) is normally viewed as a form where the authorial voice is interposed between the reader and what the character says, so that the reader is distanced from the character's word. (Leech & Short, 268)

自由間接話法の場合、引用の基準は直接話法にあるため、より間接的な表現となっている。これに対し、自由間接思考の場合は、引用の基準が間接話法にあるため、その効果はアイロニーというよりも登場人物に寄り添った表現だとしている。

- 7) 日本語の描出話法と語りに関する研究は、中村（1997）、西田（1997）、松本（1997）、伊原（2008）、橋本（2009）に詳しい。
- 8) ハルディン之声を自ら介在させて語っていると考えることも可能である。この場合、急な変化を好まない語り手の革命行為に対する不信の表明と捉えることもできる。自由間接話法は、「一義的解釈を拒む」（伊原 2008）ことで、重層的な声が見れるのが持ち味であり、多様な解釈を生む豊饒な表現といえる。
- 9) “Razumov” という名は、ロシア語で “the son of Reason”、つまり「理性の子」を表す（Explanatory Notes in *Under Western Eyes*, 285）。
- 10) 1908 年 6 月 6 日付 John Galsworth 宛書簡（*The Selected Letters of Joseph Conrad*, 223）によると執筆を開始した時点でのタイトルは、*Razumov* であった。当初の構想では、結末でナタリーと結婚し子供をもうけ、裏切りの罪から告白し死に至るという悲劇的結末が用意されていた。

引用文献

- Bimberg, Christiane. “Whose are those ‘Western eyes’? on the Identity, the Role, and the Functions of the Narrator in Joseph Conrad's *Under Western Eyes*.” *Connotations* 20.1 (2010/11): 35-79.
- Conrad, Joseph. *Under Western Eyes*. New York: Oxford World's Classics, 2003.
- . *The Selected Letters of Joseph Conrad*. Laurence Davies ed. Cambridge: Cambridge University Press, 2015.
- . “Crime of Partition.” In his *Notes on Life and Letters*. London: Dent, 1921.
- Leech, Geoffrey & Michael H. Short. *Style in Fiction A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*. 2nd ed. London: Person Longman, 2007.
- Takahata, Yusuke. “On the Discrepancy in the Narrative Focus of Conrad's *Under Western Eyes*.” *Reading*. 33 (2012): 53-64.
- 伊原紀子 『日・英小説の語りに表れる「声」：自由間接話法とその翻訳』 社会言語科学 11-1 (2008), 151-163.
- 河内清志 「Jane Austen における「語り」と「視点」」 『広島女学院大学論集』 43 (1993), 73-87.
- キャラバイン、キース 「西欧の眼の下に」伊村大樹訳、J.H.スティブ編 『コンラッド文学案内』 (2012), 204-233.
- 黒川敬三 「Jane Austen の小説における自由間接話法による発話の提示」 『新潟産業大学紀要』 11 (1994), 275-295.
- 篠田一士・土岐浩二 『西欧の眼の下に/ 青春』 集英社版世界文学全集 61. 東京：集英社, 1981.
- J.H.スティブ編 『コンラッド文学案内』 日本コンラッド協会訳. 東京：研究社, 2012.
- 諏訪間裕子 「誤謬性の投影: *Under Western Eyes* に関する一考察」 『成城英文学』 1 (1970),

47-58.

外狩章夫編訳 『ジョウゼフ・コンラッド書簡選集：生身の人間像を求めて』 東京：北星堂書店, 2000.

中川ゆきこ 『自由間接話法—英語の小説にみる形態と機能』 京都：あぼろん社, 1983.

中村哲也 「国語教材研究への文体論的アプローチ:文学教材における〈自由間接話法〉の諸相」
(〈特集〉人間関係を切り拓く言葉の指導) 『国語科教育』 44 (1997), 47-56.

西田谷 洋 「発話態度と話法: 政治小説のアイロニー性」 『金沢大学語学・文学研究』
26 (1997), 32-41.

橋本陽介 「「物語世界の客体化」からみる自由間接話法の言語間比較」 『藝文研究』
96 (2009), 181-165.

松本修 「文学教材の〈語り〉の分析について」 『上越教育大学研究紀要』 17 (1997), 147 -
159.

松方由美子 「「西欧人の眼に」に見られるメタフィクション的要素」 『弘前学院紀要』 28
(1992), 63-69.

三木悦三 「ダイクシスと語り」 『熊本県立大学文学部紀要』 18 (2012), 101-123.

山口美代子 「英語自由間接話法の日本語訳:事例研究と今後の研究への問題提起」 『京都府
立大学学術報告 人文』 45 (1993), 15-36.

ルーテ、ヤコブ 「コンラッドの語り」 宮川美佐子訳, J.H.スティブ編 『コンラッド文学
案内』 266-293.